

国際おきなわ

No.63

KOKUSAI OKINAWA

第36回「外国人による日本語弁論大会」

去る2月9日(土)にパレット市民劇場において「第36回外国人による日本語弁論大会」を実施しました。キルギスや韓国、ドイツなど県内に在住する12名の外国人(10の国と地域)が登壇しました。日本や沖縄での日頃の異文化体験や地域住民との共生に関する自身の意見を堂々と日本語で発表し、400名余りの来場者が熱弁に聞き入りました。

最優秀賞に相当する沖縄県知事賞を受賞したのは、「外国人バイヤーに思う」と題し弁論を展開した中国

出身の厳豊さん(サイ・テク・カレッジ那覇校)。厳さんの弁論では中国など沖縄を訪れる外国人観光客に対して、もっと沖縄の歴史や文化を学ぶ場に触れる機会を増やすべきだと主張し、これからも留学生として中国と日本の友好の架け橋となる人材として頑張っていきたいと意気込みを語りました。

当日は多くの皆様にご来場いただき、また多くの関係者の皆様にご協力をいただき、無事に大会を終了することができました。心から感謝申し上げます。



表彰式の様子



大会に意気込む弁士

●●● 第36回大会入賞者 ●●●

賞名	氏名	演題	国籍	所属
沖縄県知事賞	厳 豊	外国人バイヤーに思う	中国	サイ・テク・カレッジ那覇校
沖縄県国際交流・人材育成財団 理事長賞	Brunner, Sarah Esther	国際社会における難民問題	ドイツ	沖縄尚学高等学校
沖縄テレビ賞	黄 玉钰	言葉は心の掛け橋	中国	琉球大学
審査員特別賞	Tamang, Ranjeet	留学生のなやみ	ネパール	学校法人ゴレスアカデミー 日本文化経済学院



公益財団法人
沖縄県国際交流・人材育成財団

OKINAWA INTERNATIONAL EXCHANGE & HUMAN
RESOURCES DEVELOPMENT FOUNDATION

演題

外国人バイヤーに思うこと

サイ・テク・カレッジ那覇校 巖 豊



みなさん、日本が技術大国から観光立国へと変化しつつあるって、本当なのでしょう。

2017年に国土交通省が発表した「観光立国推進基本計画」によると、2020年の外国人旅行者は、一年間で4000万人になるそうです。去年の外国人旅行者が、一年間でおおよそ2900万人であったことを考えると、ものすごい勢いで外国人旅行者が増えてきます。

沖縄県も今後旅行者が増え続けていくと思いますが、今現在、沖縄にはどのくらいの数の旅行者が来ているのでしょうか。

沖縄県は一昨年、約270万人の外国人旅行者によってにぎわったそうです。これは経済面から見れば喜ばしいことだと思いますが、反面外国人が増えれば増えるほど、様々な問題も起こってくるだろうと思います。

みなさんご存知の通り、沖縄に来る外国人の中で大半を占めるのが中国人です。ですから那覇の国際通りや新都心のお店には、中国人観光客を呼び込むための中国語の看板や放送があふれています。それはまるで中国国内の風景で、那覇市に住んでいる中国人の自分でさえ、「ここは本当に日本のだろうか」と疑ってしまうほどです。

その中でも特におかしかったのが去年の十月初旬・中国の建国記念日である「国慶節」当日の那覇の街の様子でした。国慶節おめでとう、こんな看板をたくさん見て、中国人にお世辞を言う日本人を可笑しく思いました。お金をたくさん使って欲しいのはわかりますが、他人の国の建国記念日を祝う必要があるのでしょうか。

店内に中国語が話せるスタッフをおくのは必要かもしれませんが、国慶節を祝う看板はやり過ぎです。普通の中国人旅行者にとっては、旅行気分を台無しにされるのではないのでしょうか。

今、普通の旅行者、という言い方をしましたが、そもそも中国人旅行者の中には普通でない旅行者がたくさんいます。一つが、「帰らない旅行者」で、もう一つが、「バイヤー旅行者」です。

今から二十年前くらいまでの、中国がまだ貧しかった頃には、この「帰らない旅行者」がたくさんいた、と聞いたことがあります。しかし今では中国も豊かになり、帰らない旅行者など有り得ないのではないかと考えていました。ところが実際は、減っているどころか増えているそうです。これは、今まで厳しかった日本のビザが「観光立国推進基本計画」により緩くなり、貧しい農村の中国人でもビザが取れるようになったことが大きな原因です。帰らない旅行者は、日本に住んで何をしているのでしょうか。三万円であの在留カードを作ってくれる中国人がいるという噂を聞きました。たぶんその在留カードを使って沖縄で働いたり、あるいは犯罪に手を染めているのだらうと思います。

それからもう一つ、「バイヤー旅行者」と言われる人たちがいます。この人たちは観光が目的ではなく、沖縄で安く買って中国で高く売るために、仕事として沖縄に来る人たちです。彼らは会社の仕事で来るのではなく、そのほとんどが個人で儲けるために沖縄で生活用品や薬、電気製品などを大量に買って帰り、中国の通販サイトで高値で売りさばきます。みな

さんは薬屋さんとかで品切れの貼紙を見たことがあると思いますが、その原因のほとんどは、もしかしたら中国人の爆買いのせいかもしれません。

ところで、私の日本人の友人たちは、この中国人の爆買いを苦々しく思っているようです。彼らが言うのは、自分が儲けるために商品の在庫を買い占めてしまっただけは、他のお客様の迷惑になるだろう、という事です。日本に来たばかりの頃、私は彼らの意見に賛成できませんでした。一昨年沖縄で観光客が消費した金額は2億5千万円ですが、その半分以上が中国人によるものです。これだけの経済的貢献をしているのであれば、他の人の迷惑など関係ないだろうと思っていたのです。

ですが、この考え方は、日本に住めば住むほど間違っていると感じるようになってきました。純粹に旅行を楽しみたいと思う普通の中国人旅行者は、中国人にとって便利で、中国人があふれている観光地を嫌います。バイヤー旅行者たちは、確かに短い期間にたくさんのお金を落としてくれますが、彼らは買い物するだけで、高級ホテルに泊まることもなく、レストランで食事し、様々な施設に入場することもありません。長い目で見た時、本当に沖縄に経済的貢献をしてくれるのは、実は普通の旅行者なのです。彼らは沖縄の良さを口コミで広め、自らも沖縄旅行のリピーターとして、長く沖縄に経済的恩恵を与えてくれるでしょう。

そう考えると、沖縄は観光地としての長所を活かしきれていないと思います。街にあふれる中国語の看板は、単にバイヤーを喜ばせるだけのものであり、インスタグラムや中国のSNSに投稿されることはありません。反面、琉球文化を楽しむに訪れた普通の旅行者は、友人たちに沖縄の印象を良くは語らないでしょう。

沖縄には昔から守り続けられてきた色々な文化があります。シーサーという守り神様がいて、石巖とうというモンスターをやっつける強い呪文もあります。そして青い空、青い海。外国人旅行者は、そういう文化や景色を求めて沖縄にやってくるのです。

まずは沖縄の人をお願いします。街にあふれる中国語を減らして、「建国記念日おめでとう」といった看板をなくしてください。道で中国語のチラシを配って、中国語で話しかけるのもやめてください。その代わりに、外国人旅行者に「ばかりゆし」を格安で買えるようにし、那覇空港で島ぞうりをプレゼントしてください。かりゆしと島ぞうりで過ごす沖縄旅行の経験は、きっとリゾート感満点で記憶に残る旅行になるはずですよ。

最後に旅行会社の人をお願いします。平和祈念公園やひめゆりの塔を訪れるツアーを、強く中国人や韓国人観光客に薦めてほしいのです。行きたいという人はいないと思いますが、私はそこに行って、日本に対する見方が変わりました。戦争は中国人や朝鮮人だけでなく、すべての国民に忘れがたい悲しみを与えるものだという、当たり前のことがわかるようになるのです。嫌いだけど買物のためだけに来る沖縄から、心の痛みを分かり合える場所として、沖縄の魅力をアピールしていくことが、この島の一番重要な役割ではないのかと思います。

演題

国際社会における難民問題

沖縄尚学高等学校 Brunner, Sarah Esther



汚れた服を身にまとい、新聞紙を敷いて地面の上に横たわる人たち。風と寒さから身を守るため地下鉄にいる人たち。食べ物を買うためにひざまずき通行人にお金を乞う人たち。これは、私の国ドイツで学校から帰る途中に見られる光景です。こういった人々の半数以上は、貧困や戦争や死から逃れてきた難民です。私たちの想像を超える困難な人生を送り、どうすることもできない状況にいる人々について今日お話をします。このスピーチの中で私は、難民問題に直面しているドイツの状況を報告し、日本のように難民を積極的に受け入れない国々が将来重要になってくることを伝えたいと思います。

2017年、6800万人以上の人々が自国から逃げ出しました。その人数はフランス全人口に相当します。第二次世界大戦以来、同時期にこれだけの人々が自国から逃れたことはありません。その中の140万人がドイツで難民となりました。その数は世界の難民の2%になります。そんなに多く感じないかもしれませんが、ドイツは世界で最も難民を受け入れている国のひとつで、ヨーロッパではトルコに次いで二番目です。皆さんがドイツにいれば、街中にいる難民に気づくでしょう。ドイツには難民キャンプと呼ばれる、大きなホールがいくつかあります。時には、難民の人たちが夜を過ごすキャラバンやテントが駐車場を覆いつくすこともあります。ドイツは、経済が発展し社会制度が確立しているため、多くの難民が、新しい人生を始めるうえでドイツは理想的な国だと見ています。

学校の授業で難民問題はよく扱われるテーマです。学校は、難民キャンプを手伝うなどの社会活動を奨励します。人権を扱う機関、国際アムネスティによる部活動が多くのある学校であります。私もその部活動で難民を助けるための企画をしました。学校で服を集め難民キャンプに寄付し、プレゼンテーションを通して生徒に難民についての情報を提供しました。また政府のプロジェクで、学校で難民に二年間ドイツ語を教え、期間中に努力しドイツ語が話せるようになって生徒は通常のクラスに入り勉強が続けられます。これにより彼らはドイツ人と共存し、争いのない国で新しい人生を始めることができます。また、ドイツ人の生徒たちは、難民の生徒たちと親しくなることで、悲惨な経験をした同世代のことを知ることができます。難民の人

たちの過半数は18歳以下の子供たちです。私はたまたま繁栄した国に生まれたので、彼らがどんな困難な状況に置かれたのかは想像できません。しかし、生まれた場所と環境が運命を支配するのは、とても不公平なことだと思います。

皆さんは、難民について何を知っていますか。難民という言葉聞いたとき何を思いますか。日本のクラスメイトに尋ねた時、多くの人は何を思うのかさえ考えていませんでした。

日本の学校では、難民について教えられることはありません。私は、その事実について驚きました。ドイツでは、全ての生徒が難民について基本的なことを知っています。そこで、日本について調べた結果、日本にも避難場所を求める難民がいることがわかりました。2017年には2万人の難民申請がありました。しかし、難民として認定されたのは、わずか20名です。難民の人たちは性や国籍や特定の社会集団に属することで迫害を受けている人たちです。こういった背景は証明するのが困難で、それゆえに「証拠不足」という理由で申請が拒絶されています。日本の難民認定はわずか0.1%でドイツの340倍低い率です。高齢化と人口減少で労働者不足になる日本で難民の受け入れが少ない事実には驚いています。一方、難民に対する経済支援は、2017年には米国とドイツに次いで日本は1億5千2百万ドルという巨額を支払っています。

多くの難民を受け入れることは、たくさん問題を引き起こすことも事実です。例えば、ドイツでは2016年新年にケルン、ハンブルグで暴動があり、移民男性たちによる多くの盗難もありました。ベルリンなどでテロも起こり、国民に恐怖と不安をもたらしました。です。何千万の人々を救うか自国の人々をいかなる危険からも守るのか、日本は選択しなければなりません。どの選択をしても私は尊重します。もし家族か何千人の人々のいずれかを選ばなければならない場合、私は家族を選択するでしょう。しかし、適切な社会構成の中で、難民の人たちを温かく迎え、学校で教育支援を行い、宿泊施設を提供することで、世界に貢献し少子高齢化の進む日本の問題を解決する糸口になるかもしれないということを頭の中に入れていて欲しいです。

ご清聴ありがとうございました。

2018年度 災害危機管理シンポジウム

島嶼県沖縄の災害危機管理の課題と地域防災力を高めることを目的に、1月18日（金）に沖縄産業支援センターにおいて「2018年度災害危機管理シンポジウム」を実施し、地域防災計画に定められている関係団体などから140名が参加しました。

シンポジウムではまず、名古屋大学減災連携研究センター長の福和伸夫氏により「次の震災について本当のことを話して見よう」というテーマで基調講演が行われました。福和氏によると、亥年は関東地震、南海トラフ地震、内陸地震、東北・北海道の地震、台風など、過去最悪の災害が発生した年に当たり、亥年である今年一年、いつ地震が起きても良いように備えをしておきたいと述べました。また、「ライフラインやインフラの相互依存は災害時に大きな障害をもたらす、広域・複合災害では資源が確実に不足する。沖縄で地震が起らないとは絶対に考えないでほしい。」と強調しました。

引き続き行われたパネルディスカッションでは、（一財）ダイバーシティ研究所代表理事の田村太郎氏によるファシリテートのもと、「島嶼部の抱える問題と沖縄特有の地域防災」をテーマに、地域が抱える災害危機管理上の課題を掘り下げ、これまでの取り組みや対応策等について討議が行われました。パネラーとして、沖縄セルラー電話株式会社常務取締役技術本部長の山森誠司氏、琉球大学医学部附属病院救急部長の久木田一朗氏、日本空港ビルディング株式会社旅客ターミナル運営本部施設運営部管理役志摩憲美氏の3名が加わり、それぞれの立場から以下のことについてディスカッションが行われました。

1. 18年に発生した災害や水害台風では、空港の孤立や訪日外国人の滞留、予想以上の停電や断水が各地で見られた。18年の災害で対応されたことや、新たに体制を整え直したりしたことについて。

2. 旅行者や施設利用者などへの初動の対応や、避難者の受け入れを想定した準備をしているか。人員の配置やマニュアルの変更など、とくに発災直後の体制について、現在取り組んでいることについて。
3. 災害時対応は多岐にわたるため、1つの組織だけでは課題解決は困難である。これからの災害に備えた多様な担い手間の連携、ネットワークのあり方について、課題に感じておられることや、今後に向けた提案について。

シンポジウム全体を通して、沖縄固有の課題や今後の展望など、とても貴重なお話を聞くことができました。本シンポジウムは、島嶼県沖縄の地域防災を高めるべく毎年この時期に開催して参りたいと思います。今回、ご登壇・ご参加下さいました皆様、誠にありがとうございました。

《シンポジウムを終えて…》

福和先生と初めてお会いしました。講演を依頼するくらいですから、こちら事前先生についてはリサーチをしておりましたが、想定を超えるお方でした。空港でお出迎えし、会場に到着するや“この建物のチェックをしてきます”とカメラを持ってどこかに行ってしまわれました。控室に入ったの会話がいきなり「自宅の家具を留めていますか」でした。その後も「飲料水は備蓄していますか」「量はどのくらいですか」「家族は何名ですか」と質問を受け、正直面くらいました。しかし、講演の終盤に画像入りで紹介いただいた先生のご自宅を見て納得！水や食料の備蓄はもちろん、ソーラーパネルに家庭用蓄電池、家具はすべて固定し、おまけに平屋という念の入れようです。そういう方が「備え」についてのお話をなさったわけですから、響かないわけがありません。改めて自身の備えについて考えさせられ大変勉強になりました。



パネルディスカッションの様子



福和氏による基調講演の様子

災害危機管理シンポジウムが 新聞に取り上げられました！

沖縄にも大規模地震が来る！

福和伸夫・名古屋大減災連携研究センター長が予測

シンポジウムのパネリストら＝18日、沖縄産業振興センター



在沖外国人への情報伝達が課題

一気に破壊される可能性があり、これが東日本大震災や南海トラフ地震と同様のリスクがあるという報告書をまとめた。調査結果は米科学雑誌「ジオフィジカル・リサーチ・レターズ（オンライン版）」に昨年7月、掲載された。

沖縄県は毎年、総合防災訓練を行っている。その中で、自治体や警察、消防署、自衛隊、民間インフラ関連企業などの連携を確認している。それに加え、陸上自衛隊第15旅団（那覇市）が6年前から「美ら島レスキュー」と題する図上訓練を実施している。17年から県との連携になり、6回目となった昨年は、米軍を含めた100を超える機関から約1300人が参加した。

今回の災害危機管理シンポジウムは、沖縄県民に防災危機管理の意識を高め、沖縄に滞在す

る外国人にいかにか情報伝達するかを目的で開催されたもの。行政職員、地域防災に定められている機関の職員、災害時外国人サポーターら約150人が参加した。

沖縄県には現在、1万6000人の外国人が暮らしており、国籍は120カ国に上る。これに加え、年間200万人を超える外国人観光客が沖縄を訪れる。大規模震災が発生した場合、空港や港が使えず、容易に他県からの応援が得られないことが想定される。

主催者を代表して沖縄県国際交流・人材育成財団の根来全功国際交流課長が講演し、「災害時の外国人のニーズを知らなければならぬ」と指摘した。京都市が在留外国人を対象に行ったアンケートでは、「情報が欲しいが入ってこない」という問題が浮き彫りになったという。

「日本語の分かる人と分らない人の情報格差をなくす努力が必要」だが、いざという時は外国語能力以上に問われるのが相手を理解する気持ちと対応力であると説明した。

続いて基調講演したのが南海

トラフ防災対応検討ワーキンググループを主催する名古屋大学・減災連携研究センター長の福和伸夫氏。福和氏は冒頭、シンポジウム会場を視察した所感として、「公的機関の建物なのに、ひとつも家具が止まっていない」と述べ、家具転倒防止対策が何一つ取られていないことに苦言を呈した。

「沖縄に大地震は来ないというのはいさかい。必ず大きな地震があるだろうと予測する。『最近台湾と熊本で多くの大地震が起きており、その間にある沖縄で起きないということはない』と指摘した。沖縄では、1971年に沖縄本島南方の沖合でM8クラスの海溝型地震が発生し、11分の津波が押し寄せたことが報告されている。

昨年、島根と大阪でM6・1の地震が起きたが、被害は100倍の差があったことを指摘し、「人は離れて住んだ方が安全」だと強調。阪神淡路大震災から学んでいないと批判した。沖縄については、屋根は重く、窓が大きいという家屋の特色や住宅が密集していることから、大規模震災での被害は大きくなると想定した。

パネルティスカッションでは、福和氏に加え、大規模震災の時の重要インフラとなる携帯通信、病院、空港の担当者が登壇。一般財団法人ダイバーシティ研究所の田村太郎代表理事がコーディネーターを務めた。

パネリストらは、沖縄県民が大震災に対する備えや意識が十分でないことを認識したと強調。大震災では一刻と状況が変わり、「ツイッターなどのSNSが役に立つ」ことを確認した。

6434人が亡くなり、負傷者は4万人以上、約64万棟の住宅が全半壊するなど甚大な被害が出た阪神淡路大震災から17日で24年。その後も、2011年の東日本大震災、16年には熊本地震など、日本は数多くの大規模震災に見舞われた。昨年だけでも島根県西部、大阪府北部、北海道胆振

地方中東部でM（マグニチュード）6を超える地震が発生した。沖縄県は過去100年、大地震による被害を受けていないが、2010年には沖縄本島沖南東部の琉球海溝でM7・2の地震が発生した。

県民の意識と備えが不十分

名古屋大学大学院環境学研究所付属地震火山研究センターの田所敏一准教授、琉球大学理学部の中村徹教授、静岡大学防災総合センターの安藤雅孝客員教授らのグループは昨年8月、琉球海溝沿いのプレートの境目が

沖縄県には現在、1万6000

「沖縄に大地震は来ないというのはいさかい。必ず大きな地震があるだろうと予測する。『最近台湾と熊本で多くの大地震が起きており、その間にある沖縄で起きないということはない』と指摘した。沖縄では、1971年に沖縄本島南方の沖合でM8クラスの海溝型地震が発生し、11分の津波が押し寄せたことが報告されている。

那覇で災害危機管理シンポジウム

年間の観光客が900万人を超える沖縄県で大規模な災害が発生した場合、どう乗り切るのか。空港や港が使えず、他県からの支援が容易に得られないことが想定される中、どのような対策を取るべきなのか。災害危機管理上の課題や対応策について考えるシンポジウムが18日、那覇市で開かれた。

（沖縄支局・豊田 剛）



基調講演する福和伸夫氏＝18日、沖縄産業振興センター

English and Cross-culture Seminar

英語と日本語による自己発信力の向上を図り、多角的な考え方を養うための English and Cross-culture Seminar を沖縄科学技術大学院大学 (OIST) において、今年度は 5 回実施し、延べ 87 名の高校生や大学生の皆様にご参加いただきました。

本セミナーは 2 部構成になっており、午前中のセッションは OIST の外国人研究者等がインストラクターとして参加し全て英語で行われます。インストラクター一人に対して、参加者はほぼ 1 対 1 で対応しなければならず、それぞれ知っている単語を駆使したり、伝わらなければジャスチャーやスマートフォン等で検索した画像を用いて説明するなど、「とにかく伝える！」というサバイバルな状況の中、一生懸命に取り組みました。また、毎回ディスカッションのテーマが与えられ、「沖縄の観光産業の持続的な発展」や「LGBT と多様性」など多岐にわたる様々なテーマに関して、参加者全員で意見を述べ合いました。参加する OIST のインストラクターの出身国がスウェーデンやインド、

イランやペルーなど多国籍であることから、テーマに関して様々な国の事情も知ることができました。

午後の批判的思考力を高めるためのセッションは、日本語で行われ、与えられるテーマに関して多角的に分析し、自身の意見を相手に論理的に説明するトレーニングを行いました。「日本における超高齢化社会と少子化」、「格差問題」や「高度外国人材の登用」など様々なテーマに関して意見が交わされました。参加者からは「普段学校で考える機会のないテーマについていろいろな方向から物事を考えることができた」「参加者同士でディスカッションするのが楽しい。またぜひ参加したい」等の感想が寄せられました。

英語や日本語によるコミュニケーション力を高めたいと考える高校生や大学生の皆さん、新年度においてもすでに開催を計画しております。普段なかなか接する機会がない OIST の外国人研究者の皆さんとコミュニケーションを図れるチャンスです。多くの皆様のご参加をお待ちしております！



〔2019年度新規事業〕

外国人のための法律・生活相談

多文化共生の新事業を開始します！

外国人のための法律・生活相談



実施内容

■生活相談

財団内に相談窓口を設け、日本の各種社会制度や生活習慣など、生活するために必要な情報を提供するほか、日常生活を送る上での困りごとや悩みごとや直面している問題についての相談に無料で応じます。

■法律相談

予め生活相談を実施し、法律等の高度な専門知識が必要とされる問題について、沖縄弁護士会と連携の上、アドバイスを行います（開催日などの詳細は、後日HPに掲載します）

対象者

原則として県内の在住外国人

対象となる相談内容

■ビザ・在留資格、国際結婚、離婚、賃金、労働問題等生活全般に関すること

守秘義務は遵守します

相談申し込み方法

■相談希望者は、財団HP (<http://kokusai.oihf.or.jp>) 内のオンラインフォームからお申し込み下さい。



お問い合わせ：（公財）沖縄県国際交流・人材育成財団 国際交流課
TEL: 098-942-9215 HP: <http://kokusai.oihf.or.jp> FB: <http://www.facebook.com/oihf60>

外国人が地域住民として直面する諸問題に対して、日常的に相談できる窓口を財団内に設置し、外国人向けに多言語による生活相談を実施します。また、法律等の専門的な観点からの助言が必要と判断される場合を対象に、沖縄弁護士会等の専門機関との協働により、相談者のビザ・在留資格、国際結婚、離婚、賃金、解雇などの労働問題、事故、契約など生活全般に関して定期的に相談会を実施します。相談の申し込み方法等については、ホームページに掲載します。

ウチナーンチュ子弟等留学生受入事業

当財団では沖縄県の委託を受けて、海外移住者の子弟やアジア諸国の優秀な人材を県内大学や企業などで修学・研修させ、将来のウチナーンチュネットワークの架け橋となる人材を育成する「ウチナーンチュ子弟等留学生受入事業」を実施しています。

本年度はアルゼンチン、ブラジル、ペルー、ポリビア、中国、台湾の6つの国と地域から12名の留学生・研修生が沖縄で留学・研修を行いました。

大学や研修機関での修学・研修以外にも戦中・戦後の沖縄についての知識を深める平和学習や県民との交流を深める伊江島民泊体験等、年間10回の研修を組んでいます。

開催する研修の中には、沖縄と日本本土の文化を比較し学ぶ京都研修も含まれており、今年度は2月に2日間の日程で京都研修を行いました。研修先の京都では重要文化財である二条城や御堂に柱を33本有する特徴的な建築様式で知られる三十三間堂、ユネスコ世界文化遺産にも登録されている清水寺等、千本鳥居で有名な伏見稲荷大社を訪問することができました。そ

の中でも1日目に二条城では鶯張りの板の仕組みや見る角度によって絵の変わる欄間など現在でも受け継がれている日本の職人技を見ることができました。

2日目に訪れた清水寺では、シンボルである「清水の舞台」には一つも釘が使用されていないことを知ると学生達も驚きを隠せませんでした。

また、文化体験の一環として行った茶道体験では、流派によってお茶のたて方や作法が異なること、お茶を立てることは「精神統一」の意味もなしていたこと等、茶道の心得なども知ることができました。お茶を立てるという作業では、茶道の流派が裏千家であったため、「音を立てる」ということが一つの作法でもありました。そのため、お茶は泡を立てるように立て、あまったお湯は湯釜へ音をたてて戻す等、皆苦戦しながらも茶道に挑戦しているようでした。この研修で沖縄と日本本土の建築様式の違いや文化・歴史、人々の生活様式などを比較し新しく得た知識を留学生のこれからの人生にも活かしてほしいと思います。



伊江島民泊研修



文化研修（伝統工芸体験）



平和研修（沖縄戦について考える）



京都研修①



京都研修②



京都研修③

ファン ユーシャン

黄 昱翔 (琉球大学教育学研究科教科教育専攻社会科教育コース)

国際交流課でのインターンシップを通して



2月21日(木)から3月1日(金)の間、琉球大学大学院生の黄 昱翔(ファン ユーシャン)さんを当財団国際交流課のインターンシップ生として受入れました。「ウチナーンチュ子弟等留学生受入事業」等の事務補助を行っていただきました。日本語・英語・中国語が堪能なファンさん。1週間余りの短い期間の中で、電話での対応や細かい書類作成なども完璧にこなすなど、卓越した能力を発揮してくれました。

沖縄に住んでいる外国人の一人として、私は日々周りの「日本人」との違いについて考えさせられます。日本語の問題もありますが、どんなに日常生活の場で支障なく日本語を話せてもわからない制度や文化の違いが大きかったです。そこで県内における外国人支援は具体的にどういうふうに行われているのかに興味を持ち、財団でインターンシップしようと考えました。

今回のインターンシップでは主に県費留学生受入の仕事と一緒にさせていただきました。自分のルーツに興味を持ち、沖縄の伝統工芸、音楽、料理などを学ぶために海を渡り、沖縄に一年間来る留学生たちの資料の整理や手続の準備などをしました。三線を弾いたり、紅型を作ったりする留学生たちは、沖縄に住んでいる人々よりも沖縄の文化を詳しく知っているかもしれません。それでも国籍が違っただけで、ややこしい手続きがたくさんあることを知りました。例えば、在留資格の申込みフォームの記入を考えてみましょう。外国人なら皆英語がわかるわけではないし、日本語がペラペラ話せても漢字を読めるとは限らないし、意味が全部理解できても、申請書の質問の意図がわからないケースもあります。また留学生が安心して1年間沖縄で生活できるよう、部屋(不動産)

の契約、学校や実習先とのやりとり、住民登録など、多くの手続きは財団によって行われていますが、日々の生活の中で、沖縄に留学生として来日する外国人は他にも日々困っていることはもっとたくさんあるに違いありません。

異国にある程度住むことによって、言語だけでなくその国の政治、社会、文化などの知識をある程度習得することはできます。しかし「外国人」といっても、パスポートに記載された国籍こそがその本質的な違いではありません。ウチナーンチュの県費留学生を見たらさらにその境界の曖昧さを感じました。

「外国人」にとってやはり違いを感じるのは、病院に行ったらどの時点でお金を払うかなど、本当に細かいところまでその国の人にとって常識とされてきたことを理解することの難しさを感じます。それをサポートしていくことは、誰もが沖縄で安心して生活していけることと繋がっていると思いました。

私は台湾での兵役の代替服務で、姉妹市の議員が来た時に通訳をさせてもらったりして、国際交流の仕事に携わったことがあります。偉い人達と友好の言葉を抽象的なレベルで交わすことより、財団の仕事みたいに、一人ひとりの外国人をサポートすることのほうに、私は価値を感じます。書類など細かくて地味な作業も含め、丁寧にコミュニケーションをとることや、何か起こったら相談できることは、今回のインターンシップを通してすごく大切だと感じました。これからも国際交流の仕事に就けるか関係なく、今回の学びをもって沖縄にいる外国人、そして「外国人」として「日本人」と関わっていきたいと思いました。

日本語読み書き教室

当財団の日本語読み書き教室は平成16年度より実施が開始されました。開始当時、当教室は海外移住者支援の一環として位置づけられていましたが、この数年、従来の対象者である県系移住者子弟の受講希望者より、その他の在住外国人の方々の受講希望者が教室の席を占める割合が高い傾向が続いています。もともとは沖縄や日本にゆかりのなかった海外の方々が様々な理由で滞在し、受講生の母国語も英語、スペイン語、中国語、韓国語、ネパール語、マレー語、ドイツ語など多岐に渡ります。

「外国人労働者の受け入れ拡大」に伴う改正入管法が来る4月から施行されることは周知のとおりですが、それは、日本の文化、生活習慣の知識や日本語の習得が不十分なままの外国人労働者の方々が「お隣さん」として私たちの生活に存在し、地域コミュニティの構成員の一員となることも意味します。

当財団日本語読み書き教室は、言語の習得の場を提供することで、こういった変化に伴う困惑や不安の解消に

貢献できるのではと考えており、新年度からの講座については従来の在住外国人の方々の受講希望を確保しつつ、これまでより柔軟な方針で運営にあたる必要があると感じています。

2019年度の受講希望受付は4月が明けてから行いますので、どうぞこれからもご理解とご支援を宜しくお願いいたします。



教室の様子

兼永浩江 (医療通訳ボランティア第8期生)

医療通訳ボランティアの活動を通して



「ワクワク、ドキドキ」今日はどんな方の通訳をするのだろう。一番緊張する時です。相手の依頼者も不安なのではと思います。異国での慣れない医療機関で会った事もない人にひと時でも信頼を寄せ、ましてや個人的な事を話さなければならない。それ以上に「自分が言っている事がちゃんと相手に伝わっているのだろうか？」と内心思っているのではないのでしょうか。

似たような経験は自身にもあります。アメリカに初めて渡航した後、しばらくして現地の病院に行きました。今ほど英語も流暢ではなく、聞くのが精一杯。ましてや向こうのシステムも理解できないまま今度は症状を説明しなくてはなりません。「いつ、どこで、そのような症状になったのか。」「家族の既往歴は」「私達医者や看護師が知っておかなくてはならない薬のアレルギーはありますか」「以前に手術をした事がありますか」「何の手術でしたか」等。それだけでなくも緊張しているのに、答えるのに必死だったのを覚えています。それはファミリードクターであったり、小児科医であったり専門医、歯科医もありました。時には痛みを堪えて説明しなくてはならない事もありました。そういう時に「私の代わりにこの思いを伝えてくれたらなあ」と思ったものです。今思えば内容さえ理解できれば、それ程緊張する事柄でもなかったのですが。

そういう経験を踏まえ、言葉で困っている人達の助けができないだろうかと思っていた時に医療通訳ボランティア募集を目にしました。「これだ。」と一瞬で思いました。それからの講習や、専門のゲストスピーカーの方達の役に立つお話しを聴講できた事は貴重な経験となっています。乳幼児の健康診査では日本の医療機関や制度に慣れていられない親御さんやそのお子さんと医療通訳ボランティアを介してお手伝いでき

る事はとても素晴らしい事だと思います。

全ての活動が国際交流課からの依頼になるので、日時が決まっている事がプラスとなり、事前に下準備する事ができます。この日数をフルに活用し、講習で学んだ内容を再確認したり、考えられる出来事を想像しながら分からない項目をリサーチし学んでいます。

沖縄に来られて間もない親御さんが栄養相談で「日本で普及している食材を使用して、子供の体重を増やすにはどのような料理方法がありますか」と聞かれ、栄養士の方からのアドバイスを通訳し安心して頂いた事もあります。小児科の先生との問診の時に「母国で乳幼児が予防接種を受ける年齢が日本と異なる為に日本の予防接種の時期に受けた方がいいのでしょうか」と質問をされた親御さんもいらっしゃいました。乳幼児健診のサポート依頼が多いので楽しみながら通訳をさせて頂いています。毎回同じ状況にはならないので気づかされる事や学ぶ事がとても多いです。

一期一会という言葉があります。その機会は二度と繰り返されることのない、一生に一度の出会いであるということを得て互いに誠意を尽くす心構えを意味するとあります。この通訳ボランティアと言う機会がなければ、先ず出会う事のない人達と医療通訳という共通の事柄で点と点が繋がり線となります。ボランティアを通して出会い、決められた時間の中で共通の言語を使用し、意思疎通を図りながら不安を解消し、信頼を深め、満足していただく。こんな素晴らしい活動は他にはありません。

今後も出来る限り経験や学びを増やし、医療通訳のサポートをする事で外国の方達の不安を少しでも解消し、笑顔でいて頂けるよう、これからも努力していきたいと思っています。



英語でのロールプレイの様子



無事に講座を修了!

どこから来ましたか？



「どこから来ましたか？」

私にとってこれは難しい質問です。

私は大学入学の為にテキサス州に引っ越しました。そこで「変わったアクセントですね。どこから来ましたか？」と聞かれ「ペンシルベニア州からです。」と答えました。(ペンシルベニア州はアメリカの北東にあります。)

テキサス州に約8年住み、卒業後、プログラマーの仕事をする為に、メリーランド州に引っ越しました。

するとそこで「どうしてブーツを履いてるの？南部のアクセントですね。なぜバーベキューやチリ、タコスを作るの？どこから来ましたか？」と聞かれ、私は迷いました。「ええっと、そうですね…テキサス州かな」そしてメリーランド州に3年住んだ後、銀行で働く為にカリフォルニア州に引っ越しました。

カリフォルニア州では「なぜスリーピーススーツを着て東部のアクセントで喋るの？どうしてクラブケーキやカキ、チェリーパイを食べるの？どこから来たの？」と聞かれ、合衆国では州によって服装や食べ物、喋り方が異なる事に気付きました。それで「そうですね…メリーランド州かな」と答えました。

カリフォルニア州に約11年住んで、英会話の仕事をする為に東京に引っ越しました。

「どこから来ましたか？」と聞かれると「カリフォルニアからです。」と答えました。

すると「どうしてあなたの日本語は関西弁なの？」と聞かれ、「カリフォルニアで京都出身の人とルームシェアをしていました。」と答えました。

「どうして卵焼きや山菜そば、きんぴらごぼう、鯛茶漬を作るの？」と聞かれ、

「カリフォルニアで、11年前から健康の為に食べ始めました。今では私にとって、日常的な食事です。」と答えました。

3年後、教師をする為に福岡へ引っ越しました。「なぜあなたの日本語は東京弁なのですか？なぜ黒っぽい服ばかり着るんですか？どうして鮪の山かけやおでん、もんじゃ焼き、ぬか漬を食べるんですか？」と聞かれ「食いしん坊ですから」と言いました。

「どこから来ましたか？」僕は答えました「そうですね…東京からかなあ。」

約4年福岡に住んだ後、大学の事務の仕事をする為に沖縄に引っ越しました。「なぜ博多弁なの？どうして明太子、もつ鍋、馬刺し、からし蓮根を食べる

の？どこから来たの？」と、よく聞かれます。「うーん」僕は答えます「福岡からかな。」

ここに「渡辺さん」という友達があります。ある日渡辺さんに尋ねました「どの都道府県から来ましたか？」彼女は笑いながら答えました。「私はドイツ出身です。」もう一人「山田さん」という友達にも同じ質問をしました。彼も笑いながら「カリフォルニア州からです」と言いました。公民館で会う2人の年配の男性は、「戦時中、ブラジルに住んでたからね。」と、ポルトガル語を話します。他にもニュージーランドやカナダ、メキシコ、フランス、フィリピンに長い間住んでいた沢山の「日本人」の知り合いがいて、中には、私よりも日本在住期間が短い人もいます。

それに、西洋人みたいな日本人もいるし、関西人みたいなウチナンチュー、日本人みたいな西洋人もいます。「人は見かけによらぬもの」と言う諺がありますが、その通りです。

出身地を誇るのは良いことですが、束縛されるべきではありません。今では、明治時代のように何週間も船旅をしなくても、安くて便利な飛行機で、数時間で他の国へ行く事が出来ます。そして毎日、何百万もの人々がそれぞれの国を行き来しています。

貴方も。他の国、もしかしたら幾つもの国々に引っ越すかもしれません。それに、インターネットがあれば行く必要もありません。インターネットで色々な国、文化、言語を学ぶことも出来ます。生まれた所に縛られる必要はありません。貴方は、貴方がなりたい人になる事が出来ます。

最近、40年振りにペンシルベニア州を訪れました。知り合いに聞かれました「なぜ半ズボンや島ぞうりを履いてるの？どうしてゴーヤチャンプルや人参シリシリ、ソーキそばを作るの？一体どこから来たの？」

「うーん…」僕は答えました「沖縄からかなあ。」



セミナーで講師として受講者に接する Holland さん

張 雅晴 (医療通訳ボランティア第8期生)

沖縄のゆったりとした空気感が体に染み渡る



沖縄で太陽をたっぷり浴びました。人々の笑顔、かりゆしウェア、空や海のブルーに映える色とりどりの花々は、旅の思い出を色とりどりに染めてくれます。沖縄なら、“こうでなきゃ”という強い念がどんどん緩んでいきます。

沖縄での時間がゆっくり流れているような気がして落ち着きます。「沖縄時間」という言葉があります。南国の気候がそう思わせるのか、人の暮らしがそう感じさせるのか、ゆったりとした空気感が体に染み渡っていきます。

沖縄の方言に県民の哲学のような考え方が見られます。例えば、「いちやりばちよーで」というのは“いったん出会えば皆兄弟”という意味です。沖縄での二年間の暮らし、県民のホスピタリティを感じます。また、「なんくるないさ」というのは“なんとかなるさ”という意味です。人間どんな苦しい状況にいても、何とかなるものだという前向きな考え方が素晴らしいと思います。長寿にまつわる「てーげー健康法」という健康法はよく知られていないかもしれません。つい最近、緒方修(2004)『沖縄野菜健康法』の本で「てーげー健康法」について読みました。“てーげーとは大概、アバウトのこと。自分に甘く、人に甘い。時間はいい加減。努力はしない。物事を突き詰めて考えない。これが沖縄式健康法だ。”

また沖縄は、長寿にまつわる健康素材と食文化の資源が豊かです。沖縄は中国に比べ、豆腐を使った料理が非常に多いです。私もほぼ毎日島豆腐、厚揚げや豆乳などを摂取しています。休みの日、私は市場や「長生草店」によく行きます。黒糖、ウコン、ゴーヤー(苦瓜)、へちま、唐辛子など、薬局の健康食品売場によくありそうなものがふんだんに使われています。ハーブの使用頻度も高く、市場にはフーチバ、にが菜、からし菜、体によくておいしい緑のものが並んでいます。買い物が終わったら寮に戻って自炊します。島野菜から力をたくさんもらいました。

私は沖縄の観光資源に健康資源の価値を見出すことが、地域創生にもつながるということを研究するため大学院に進学しました。具体的には、沖縄におけるメディカルツーリズムを研究しています。世界観光機関(UNWTO)の定義によると、メディカルツーリズムは「歯科治療や美容整形などの軽度な治療から、がん治療および心臓バイパス手術など高度な手術を含み、海外へ病気を治療しに行くこと」を意味します。

現在世界では、およそ50カ国の国々が海外からのメディカル・ツーリストを受け入れており、毎年600～700万人規模の患者が、自国以外の国の病院や診療所で治療・診察・健診を受けています。

沖縄の医療機関は、国際的な評価制度であるJCI認証(Joint Commission International)を積極的に取得しています。現在「南部徳洲会病院」と「中部徳洲会病院」はJCI認証をもっています。JCI認証は、1,000を超える審査項目があるなど認証基準が厳しいことから、認証取得により世界レベルでの高い安全基準を有していると評価されます。国際交流と更なる高度化につなげています。

沖縄県は医療を必要とするすべての外国人観光客に安心と安全な医療サービスを提供できる体制づくりに力を注いでいます。沖縄県庁では「医療ツーリズム促進事業」(平成22～24年度)、「医療ツーリズム・プラットフォーム形成事業」(平成25年度)、「沖縄型ウェルネスツーリズム等推進事業」(平成26年度～継続)などの事業を実施してきました。

沖縄県国際交流・人材育成の国際交流課は医療通訳ボランティア養成講座を毎年開講します。根来課長、葛主幹、久田さんは私たちの受講者の医療知識向上のため、6月の毎週土日、全7回講座を開催し、大変苦労しました。それでも、参加は無料です。財団は沖縄県内に住む外国人にも対応できる医療のため、人材育成を非常に重視していると感じます。

今後も医療通訳や沖縄の観光に関する勉強や経験を積み重ね、県内で医療機関を受診する外国人が、少しでもスムーズに安心して医療サービスを受けることが出来るように努力します。中国の人々にもっと沖縄のことを発信していきたいと思っています。誰もが、沖縄のゆったりとした空気感のなかで、好きなことをどんどんしていくことを願っています。



セミナーに参加する張さん

イベント情報

詳しくは HP (<http://kokusai.oihf.or.jp/>) で!



日本語読み書き教室

参加者募集 受講無料

対象 日本語の読み・書きを勉強したい在住外国人

学習内容 小学1年生～6年生程度の日本語

実施場所 沖縄県国際交流・人材育成財団 (宜野湾市伊佐4-2-16)

実施期間 2019年4月19日 (金)～

開催日時 毎週金曜日 (祝日を除く) 19:00～21:00

サポートボランティア (英・中・西) も募集!
詳しくは、国際交流課まで!

お問い合わせ: (公財) 沖縄県国際交流・人材育成財団 国際交流課
TEL: 098-942-9215 FAX: 098-942-9220 Email: kokusai@oihf.or.jp
HP: <http://kokusai.oihf.or.jp> Facebook: www.facebook.com/oihf60

災害時外国人支援サポーター養成講座 受講者募集

目的 災害時に要配慮者となりがちな外国人を支援するため、大規模災害時に当財団が立ち上げる「多言語支援センター」と協働で、避難所巡回や情報収集等を担えるサポーターを育成します。

定員 40名: 応募者多数の場合、受講できないことがあります。

募集対象者

- 外国人支援や「防災・減災」に興味がある方ならどなたでも!
- 語学力は不要です (参加無料)

講座修了認定

全講座受講者を「災害時外国人支援サポーター」として認定し、講座修了証とI.D.を付与します。

募集期間等

- 2019年3月11日 (月)～4月21日 (日)
- 講座の内容や応募方法等はHPで!

お問い合わせ: (公財) 沖縄県国際交流・人材育成財団 国際交流課
TEL: 098-942-9215 HP: <http://kokusai.oihf.or.jp> FB: <http://www.facebook.com/oihf60>

ENGLISH AND CROSS-CULTURE SEMINAR

参加者募集

目的 高校生から大学生までの若者を対象に、自分の考えを英語や日本語で論理的に発信できる基礎力を養うためのインプット型セミナーを沖縄科学技術大学院大学(OIST)で実施します。

実施内容

- OIST研究者と英語でディスカッション
- 英語によるOISTツアー・イングリッシュランチョン
- 日本語でのディスカッション・ディベート

開催日 時間: 9:30～16:00 会場: 沖縄科学技術大学院大学

- 第1回 2019年6月8日(土)
- 第2回 2019年8月3日(土)
- 第3回 2019年10月19日(土)
- 第4回 2019年12月7日(土)
- 第5回 2020年1月25日(土)

参加方法

- 各回開催日のおよそ2ヶ月前からHPで募集を開始します
- 応募者多数により、参加できないことがあります

お問い合わせ: (公財) 沖縄県国際交流・人材育成財団 国際交流課
TEL: 098-942-9215 HP: <http://kokusai.oihf.or.jp> FB: <http://www.facebook.com/oihf60>

医療通訳ボランティア養成講座

受講者募集 受講無料

目的 県内の在住外国人が安心して地元の医療機関を受診できるよう、医療通訳ボランティアとして活動できる人材を育成します。

定員 30名: 応募者多数の場合、受講できないことがあります。

募集対象

次の2つの要件を満たす方

- 医療通訳ボランティア事業に強い関心を持ち、対象言語のいずれかでビジネスレベルのコミュニケーション力を有する方
- 全講座 (7回) を受講できる方

*全講座の受講者を修了登録者として認定します。

養成対象言語 英語・中国語・韓国語・スペイン語

募集期間等 2019年5月13日 (月)～7月7日 (日) 必着
具体的な日程等は、HP(<http://kokusai.oihf.or.jp/>)で確認することができます。

お問い合わせ: (公財) 沖縄県国際交流・人材育成財団 国際交流課
TEL: 098-942-9215 FAX: 098-942-9220 Email: kokusai@oihf.or.jp
HP: <http://kokusai.oihf.or.jp> FB: <http://www.facebook.com/oihf60>

◆◆◆ 賛助会員募集 ◆◆◆

公益財団法人沖縄県国際交流・人材育成財団 (OIHF) は、本県の多文化共生社会の推進に寄与し、振興発展を担う人材育成事業や、国際性豊かな活力ある沖縄づくりを目指し、国際交流・協力事業を推進しております。当財団の趣旨や活動に賛同し、活動を支援して下さる、賛助会員を募集しています。

沖縄県国際交流・人材育成財団の事業は、会員の皆様の支援によって支えられています。皆様のご協力をお願いいたします。

【年会費】個人: 3,000円 団体: 10,000円

国際おきなわ (No.63) 2019年3月発行 編集・発行/公益財団法人 沖縄県国際交流・人材育成財団
ホームページ <http://kokusai.oihf.or.jp/> フェイスブック www.facebook.com/oihf60
〒901-2221 沖縄県宜野湾市伊佐4丁目2番16号